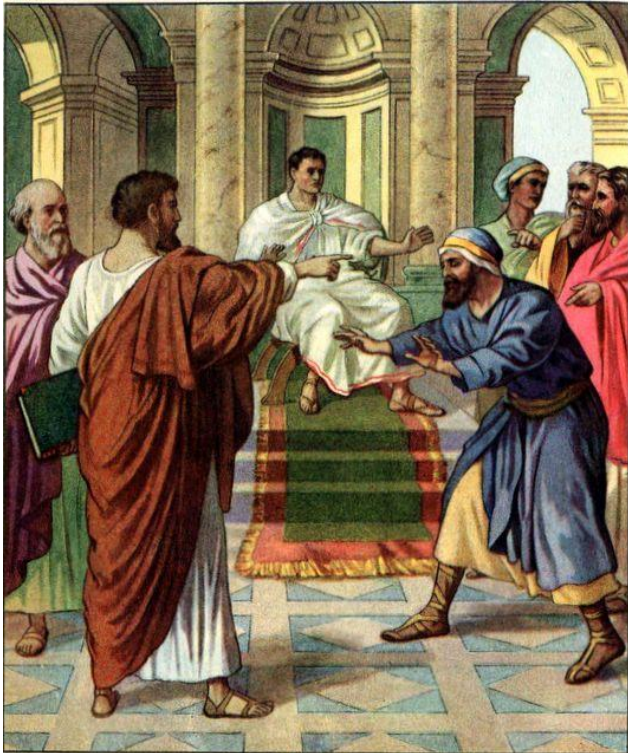


「使徒の働き」は9章後半から12章までに、ペテロによる宣教を主に記しています。今回は、パウロの生涯を学んでいきますので、そこは飛ばして13章へと入ります。ここからは、早速サウロ（パウロ）による伝道旅行が始まられることになります。



1. 伝道旅行への派遣 (1～3節)

①アンテオケ (1) 「さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。」

アンテオケは、シリアの首都で通商貿易の中心でした。異邦人教会が初めてここに生まれました。また、ここで弟子たちは、初めてキリスト者と呼ばれるようになったのです(11:26)。その教会には、パウロと共に行動したバルナバが属し、ニゲルというラテン語の通称があるシメオン、クレネ人のルキオ、国主ヘロデの乳兄弟のマナエン、サウロという預言者や教師もいたとあります。明確な信仰と宣教の心を持つ人々でした。

②聖霊の促し (2) 「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務に着かせなさい。』と言われた。」

アンテオケ教会の人々は、主を礼拝し、断食をしている時に、聖霊の声を聞きました。バルナバとサウロを聖別し、主の召した任務につかせよ、というものでした。それは、地中海世界への宣教派遣のご命令でした。

③派遣式 (3) 「そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。」

アンテオケ教会では、主からの導きをいただいてから、断食と祈りをし、バルナバとパウロを派遣しました。

2. サラミスからパポスへ (4～8節)

①キプロス島での宣教 (4～5) 「二人は聖霊に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った。サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣べ始めた。彼らはヨハネを助手として連れていた。」

バルナバとパウロは聖霊に送られて、地中海に面するセルキヤの港から、船に乗りました。向かう先はキプロス島の東にあるサラミス。そこにはユダヤ人の会堂がいくつかありましたので、そこで御言葉の宣教を始めたのです。助手となったヨハネとはマルコの福音書を記したマルコのことです。

②パポス (6～7) 「島全体を巡回して、パポスまで行ったところ、にせ預言者で名をバルイエスというユダヤ人の魔術師に出会った。この男は地方総督セルギオ・パウロのもとにいた。この総督は賢明な人であって、バルナバとサウロを招いて、神のことばを聞きたいと思っていた。」

二人は、キプロス島の西にあるパポスで、ユダヤ人魔術師バルイエスに会

いました。彼は総督の側近でした。ローマ帝国の総督セルギオ・パウロは賢明な人でした。そして、神のみことばに興味を持っていました。

- ③魔術師エルマ (8) 「ところが、魔術師エルマ (エルマという名を訳すと魔術師) は、ふたりに反対して、総督を信仰の道から遠ざけようとした。」
しかし、魔術師エルマは総督がキリスト教信仰に近づくのに反対して、パウロとバルナバの働きの邪魔をしました

3. パウロの活躍 (9～12 節)

- ①にらみつけるパウロ (9～10) 「しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、言った。『ああ、あらゆる偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵。おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。』」

しかし、サウロはそれにめげることはありませんでした。聖霊に満たされてエルマをにらみつけました。そして堂々と、「偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、正義の敵」とエルマを弾劾し、まっすぐな道を曲げる活動をやめるようにといさめました。

- ②エルマは見えなくなり (11) 「『見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる。』と言った。するとたちまち、かすみとやみが彼をおおったので、彼は手を引いてくれる人を捜し回った。」

さらにパウロは、主の御手により、しばらくの間、盲目になり、日の光を見ることができなくなると、告げたのです。すると、その言葉通りに彼は目が見えなくなり、手を引いてくれる人を求めるしかありませんでした。

- ③総督の入信 (12) 「この出来事を見た総督は、主の教えに驚嘆して信仰に入った。」

こうした一連の出来事を見た総督は、主の教え、御力に驚き、信仰に導かれたのです。

《結論》

今朝の聖書箇所最後の 12 節においては、総督が主の教えに驚嘆して信仰に入った、と述べられています。彼の信仰がごく素朴なものであっても、何か総督の心を動かしたのです。「彼は主の教えに驚嘆した」とありますが、神の権威に衝撃を受けたのです。神の権威はいかに現われていたのでしょうか。

第一に、ここにおいて、使徒パウロは魔術師エルマに決然と対応しています。つまり、総督がキリスト信仰に近づくのを阻もうとするエルマに対し、聖霊に満たされて、にらみつけています。これは人間的な威圧ではなく、主から与えられた権威によるのです。それが、不正を進めようとするエルマに対する断固たる態度として現われたのです。第二に、パウロは権威をもって、主の御心を語り告げています。『見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる』。パウロ自身がダマスコ途上において、キリストと出会った時に、目が見えなくなりました。

今回は、逆の立場です。主から権威を与えられて、魔術師エルマに対して、しばらくの間、日の光を見ることができなくなると告げたのです。それは、主からいただいて発した言葉でした。そこに、主なる神の権威がありました。第三に、パウロの宣言を受けて、エルマの目は見えなくなります。『たちまち、かすみとやみが彼をおおった』とある通りです。それは、まさに主なる神の権威に基づく、神の御力の現れでした。人間から発したものでないことは言うまでもありません。主の御力であればこそ、エルマは見えなくなったのです。そうした圧倒的な出来事の中に、主の権威と御力が実感されて、総督の心動かされたのです。そして、一気に信仰へと導かれていったのです。

さて、私たちは、人間の力や功績をほめ、賞賛することが好きです。それ自体は、否定されることはありません。しかし、そこにどどまってしまっていると、人間中心、人間賛美のわなにはまってしまいます。それよりは、大いなる事、麗しい事、驚くべき事などの背後にいらっしゃる神を発見しようとする方が有益です。そして、人間ではなく、神をほめたたえることができれば、なんと幸いなことでしょう。総督には、その心が備えられて、信仰へと導かれたのです。

松岡広和氏は僧侶から牧師になった方です。僧侶として韓国の大学院で仏教学を学んでいる時に、クリスマス集会の案内を受け、経験のため、小さな教会に参加したのです。さらに誘われるままに礼拝にも参加し、聖書も学ぶようになりました。罪の身代りとなってくださったキリストを信じることによって、救われるという福音を教えられても、自分が罪人であるということは認められませんでした。しかし、促しに従い、思い浮かぶまま、外側だけ自分は罪人であり、赦してくださいとノートしたのです。青年会の時に、彼はそれを読み上げたのですが、予想していないことがおきました。「私は罪人です。お赦ください。」と読むと、涙が溢れてきてしまったのです。人生の中で必死に守ってきた城壁が崩れ去るような時でした。心に光が差し込み、「神様はいらっしゃる」という確信に導かれたのです。その後、松岡師はクリスチャンとして歩み始め、牧師への道へと進むことになりました。

総督はパウロの背後にあって働いてくださっている、神を認めました。そして、主と出会いました。松岡牧師も自分の意図ではないところで、神を認めさせられました。双方とも神の一方的な恵みです。それは人間の思い計りを越えた、神の備えです。主との出会いは、思ってもみなかったところに、橋が渡されるようなものです。私たちができることがあるとすれば、さまざまな出来事の中から、神のお働きに気付くことができるようにと祈っていくことです。それがどんなに小さなことであっても、そこに神が働いてくださっていることを発見した人は幸いです。そして、恵みによって、主なる神との出会いが与えられたなら、目の前の橋を渡っていくことができるでしょう。それはクリスチャンにとっても、クリスチャンでない人にも共通のメッセージです。神は祈りに答えてくださる主です。

神の恵みが豊かに注がれ、まことの神を信ずる信仰をもって、喜ばしく歩いていくことができますように。